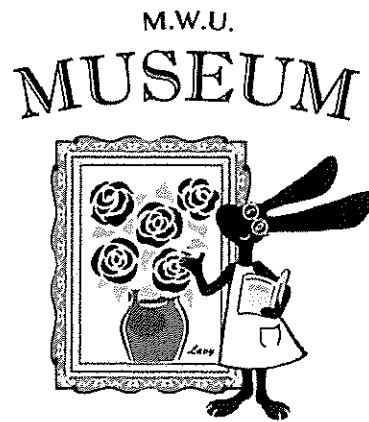


武庫川女子大学附属総合ミュージアム

令和7年度 研究報告会

研究要旨集



令和7年10月25日(土) 13時～

於：学術研究交流館 IR-101

プログラム

日 時： 令和7年10月25日（日）13：00～（15:40 ごろ終了予定／その後、茶話会）
企画内容： 附属総合ミュージアム研究員・共同研究員による研究報告会、
茶話会（自由解散）
会 場： 学術研究交流館（IR 館）IR-101
参加者： 附属総合ミュージアム研究員および共同研究員、希望者

《タイムスケジュール》

12:30～ IR-101 集合
13:00～13:10 ご挨拶

研究報告

- 13:15～13:30 中田静さんの衣服購入記録にみる衣生活（仮）
池田仁美（研究員/本学生活環境学科講師）
- 13:35～13:50 近代着物の保存に関する考察（仮）
宇野朋子（研究員/本学建築学科准教授）
- 13:55～14:10 最近の研究活動の報告と協力をお願い
鎌田誠史（研究員/本学生活環境学科教授）
- 14:15～14:30 鳴尾の水資源－利水の連鎖（仮）
黒田智子（共同研究員/本学生活環境学科名誉教授）
- 14:35～14:50 北朝地域における香炉を頭上で捧げるヤクシャ像の類型研究
平法子（共同研究員/当館学芸員）
- 14:55～15:10 当館におけるデジタルアーカイブ事業の実践と課題について
並木晴香（研究員/当館助教（臨床）・学芸員）
- 15:25～15:40 シカゴ万博に日本が出品した裁縫教育資料（仮）
樋口温子（共同研究員/当館学芸員）
- 15:45～ 茶話会（自由解散）

研究員・共同研究員 一覧

| 職名等 | 氏名 | 専門分野 |
|--------------------------------------|--------|-----------------------------------|
| 特任教授・附属総合ミュージアム館長 研究員 | 横川 公子 | 日本服飾史、生活美学 |
| 特任教授・附属総合ミュージアム副館長・元生活美学研究所所長 研究員 | 森田 雅子 | 生活美学、舞台芸術論、表象文化論、身体表現 |
| 生活環境学部 准教授 研究員 | 井上 雅人 | デザイン史、デザイン論、ファッション史、ファッション論、物質生活史 |
| 社会情報学部 准教授 研究員 | 株本 訓久 | 科学史、科学技術社会論、科学コミュニケーション論 |
| 建築学部建築学科 准教授 研究員 | 宇野 朋子 | 建築環境工学、文化財保存科学 |
| 薬学部薬学科 教授 研究員 | 奥 尚枝 | 天然物機能化学 |
| 文学部日本語日本文学科 教授 研究員 | 佐藤 勝之 | 機能的テキスト分析 |
| 文学部歴史文化学科 教授 研究員 | 武藤 康弘 | 考古学 |
| 文学部歴史文化学科 教授 研究員 | 竹内 亮 | 日本古代史（文献史学） |
| 文学部歴史文化学科 講師 研究員 | 加茂 瑞穂 | 日本近世・近代染織意匠、日本文化史 |
| 生活環境学部 教授 研究員 | 鎌田 誠史 | 集住環境（アジア）、芸術工学、建築計画、地域計画 |
| 生活環境学部 講師 研究員 | 池田 仁美 | 被服文化学、被服造形学 |
| 生活環境学部 教授 研究員 | 三宅 正弘 | 都市計画、まちづくり、食空間 |
| 音楽学部応用音楽学科 教授 研究員 | 松本 佳久子 | 音楽療法、芸術療法、非行・加害者臨床、ナラティブ・アプローチ |
| 健康・スポーツ学部 教授 研究員 | 村越 直子 | ソマティクス、ダンス、からだ、ムーブメント、臨床教育学 |
| 附属総合ミュージアム助教（臨床）・学芸員 研究員 | 並木 晴香 | 日本美術史（近世絵画）・文化情報学 |

| 職名等 | 氏名 | 専門分野 |
|---|-------|-------------------------------------|
| 阪南大学准教授 共同研究員 | 安城 寿子 | ファッション史 |
| （公財）兵庫県スポーツ協会理事 共同研究員 | 今井 良広 | 公共政策、地域経営、産業創造、コミュニティ、サードセクター |
| 放送大学 客員准教授 共同研究員 | 大高 幸 | 博物館教育論、美術館運営学、芸術メディア論 |
| 生活環境学部 名誉教授 共同研究員 | 黒田 智子 | 近代建築論、近代都市論、デザイン方法論 |
| 千葉大学准教授 共同研究員 | 古濱 裕樹 | 染色化学（特に天然染料）、天然染料染色物の色彩、洗浄、繊維 |
| 同志社女子大学非常勤講師 附属総合ミュージアム臨時職員 共同研究員 | 小林 政子 | 和裁文化 |
| 武庫川女子大学非常勤講師 共同研究員 | 伊永 陽子 | 日本服飾史（中世） |
| 東京大学客員研究員 共同研究員 | 佐藤 優香 | 近代教育史 |
| 附属総合ミュージアム臨時職員（学芸員） 共同研究員 | 平 法子 | 仏教美術史 |
| 附属総合ミュージアム事務助手 共同研究員 | 泊里 涼子 | 木工、デザイン、立体造形、素材、生活環境 |
| 附属総合ミュージアム臨時職員（学芸員） 共同研究員 | 樋口 温子 | 近代服装史 |
| 島根県立石見美術館学芸員 共同研究員 | 廣田 理沙 | 近代生活文化 |
| 岡山県立大学准教授 共同研究員 | 松山 聖央 | 環境美学、ドイツの美学思想、自然と人工、道具と技術、アートマネジメント |
| 附属総合ミュージアム臨時職員（学芸員） 共同研究員 | 森 ゆかり | 住生活史 |
| 大阪大学大学院博士後期課程 共同研究員 | 矢島 由佳 | デザイン史、工芸史 |

最近の取組みから

横川 公子

(武庫川女子大学附属総合ミュージアム館長・特任教授)

昨年度に引き続き、最近の取組みを紹介する。

① 中田静さんの生活記録とモノとの関係から見えてくる加齢の美学

中田家コレクションは、大阪市美章園の一角に、昭和10年代初めに建てられた3軒町家のうちの一軒、中田家のほぼ全ての生活財をもって構成される。寄贈された2009年6月現在の暮らしが、ほぼそのまま残され、寄贈された。調査によって、現在178080件余が確認されている。

中田家コレクションを活用した調査研究の成果として、「贈答品の中の食品」(2016年秋季展)、「粗品?粗品!時代の空気感を映す」(2018年秋季展)、「モノの棲み家 ヒトの棲み家、中田静さんの自宅より」(2023年春季展)と、3回の展覧会が実施された。2024年秋季展でも、静さんの正風未生流の準国会頭に至るまでの免状・木札が展示され、華道に取り組んだひとりの近現代の女性の姿が浮かび上がった。主に戦後期からの大阪市における生活文化の一端を発掘してきた。

今年度は、中田家コレクションの買物や交際を記録した生活記録に注目した。静さんが捨てることなく貯めこんだモノは、それぞれ梱包され、名称、購入時期、入手先や行き先、購入費、中元などの用途・趣旨等々が上書きされている。64歳からほぼ20年間に亘る記録は、単なる買い物行動だけでなく、観光や美術鑑賞などの外出や贈答や付き合いをモノのやり取りによって記している。2025年度秋季展では、この記録とモノとの関係性を探ることで、モノに宿る多様な文化的な価値を浮かび上がらせた。

記録とモノとの関係性からは、向老期における人生の在り方、いわば静さんの加齢の美学が浮かび上がってくる。

② 女子高等教育の黎明からその後

(新制大学成立以後の展開—主に教育標本資料から見た—、さらに共学化に至る女子高等教育の完成と帰結について)

2021年度から、科学研究費の助成によって、女子を対象とした教育標本について調査し、黎明期の時代背景や女子高等教育の理念との関係性について考えてきた。

近代化のプロセスにおける女子高等教育の胎動と実践は、多くは西欧にモデルを求めたものであり、近代日本が目指した文明開化や殖産興業、万国博覧会への参加や女性の社会進出等、独自の国際化の在り方と連なり、当該研究の成果は、今日の国際情勢下における女性の教育や社会進出の動向に対する現代日本の女子高等教育のアイデンティティを探るうえで、有意義な知見と反省の具体的素材を提供する。

教育標本を取り上げる核心的な問いはまず、教育標本という現物を学術的な対象として女子高等教育の歴史と意義について考察することにある。教育標本は、女子高等教育の具体的な内容およびその歴史と不可分に構成される。教育標本が示唆する直感的で体験的な理解は、現場における教育内容や目的を、言葉や文章の内容に留まらず、多義的に示唆し、文字による歴史の構築とは別の実体を照らし出すはずである。たとえば教育標本である有職人形の素材や質感に見る完成度の高さは、知識の伝達以上の感動や思想・関心にも与する価値を孕んでいるだろう。

また、女子高等教育は、女性の指導者や専門家を育成し、女性の社会的地位の向上と共に社会に貢献することを目指した近代に特徴的な制度である。1947年の教育基本法を機に女子大学は、新制大学に転換された。国立・私立に関わらず、男女平等の理念に基づく機関へと転換した。そんな中で女子大学に託された理念や役割は、内実としてどうであったのか、それは具体的な教育標本をめぐる関係性にも反映しているだろう。たとえば1960年代前後の生地見本のような教育標本に、時代の先端を行く化学繊維・合成染色が反映している一方で、伝統的な人形制作が実習教材として取り上げられるなど。そうした教育標本の変容が、今日の共学化にどのように関係するのか、未来的な課題としても、さらに取り組むべき課題である。

③ 武庫川女子大学近代衣生活資料の現物確認における課題の多層性

2024年度より5年計画で、民俗文化財伝承・活用等事業として補助金交付が決定している。同年4月より調査グループを立ち上げ、現物確認を継続的に実施している。

調査を進めるに伴い、資料の名称や構成、その他の特徴に関する全体的傾向や具体的な課題が浮かび上がっている。

現物確認によって提起される課題・事柄には、文化財保存や伝承のためばかりでなく、着物類の調査をする際の基準や、対象の技術的構成や色彩・文様・素材等の表象性など、着物資料の様々な特徴を示唆する具体的な内容が発掘・蓄積されている。先行する国立博物館等の分析とは異なる、スタンダードの設定や価値の在り様を探求する必然性がある。

現物確認を進めるとともに、以上のような様々な課題の検討により、近代衣生活資料の歴史的多層性の解明を進めていきたい。

④ 生活資料に見る「戦争」表象の諸相

生活資料に見る「戦争」に関する表象の諸相について、当館収蔵資料の展示によって公表してきているが、現在進行形で、2026年度秋季展に向け、共同研究体制によって調査・検討を進めている。キモノや生活用品に付けられた文様表現をはじめ、素材や用途にまつわる生活文化的関係性やさまざまな出版物に視野を拡大している。

皆さまの寛容なご支援をいただきながら横川公子館長の補佐をし、生活美学研究部門の統合の完結と、本学の学術的、実学的背景、モノと記録のアーカイブマネジメントをめざした。そのアーカイブズ学推進の大学院構想を模索するのが近々の作業目標である。

まずは春季展、秋季展と諸展示会運営（全学ミュージアム化を模索する公募展、半襟コレクションの活性化をめざすワークショップほか）、紀要刊行委員会運営に参加している。次年度秋季展プロパガンダ展の準備を進めながらも、助成金『地域を対象とした連携推進支援事業：「郷土鳴尾をものがたる：暮らしの伝承」プロジェクト』を獲得し、微力ながら表象をつらぬく物語性の研究を深めた。

今年度の研究成果として模倣、再現、再提示、再構成、置換の操作を通じモノと記憶を結び、物語を紡ぎだしてゆく人間のサーバイバルの営みを再確認した。主たる論点を3点挙げる。

1. 春季展『モノ×ことわざ展』5/14-7/2—道具を手立てとしたことわざを、ことばあそびや口承ベースの世界観や人生哲学伝達の仕組みと解釈して展示した。生活の知恵を公（おおよけ）の記憶にアーカイブ形態で収納する試みである。ことわざは記憶性の高いものが多い。

2. 秋季展『加齢の美学—大阪町家における静さんの暮らしの記録—』10/1-12/3

静さんの手帳に丹念に記録された消費行動と贈答儀礼の覚書の目的について考究した。生活行動と照合する遺品などの分析をした。静さんの目標は、戦争などの破壊行為、闘争が終息した戦後の生活空間にすっぽり収まる贈答儀礼と生活財・生活領域のケアに完結することであり、大戦の犠牲者や先祖を供養し、報恩謝徳の輪を結ぶことであった。それが静さんなりの反戦運動であった。「大切なのは、モノたちが遊動循環し、世の中に安らぎがと充足がいきわたることなのである。こうして自己の創生をもたらしてくれるのはモノの遊動循環と充足である（森田雅子 2025）。」

まとめると、手帳には中田静にとって贈答の儀礼の手順の確認という目的があった。贈答関係には人的資産の保全効果があり、それにより祖先の供養や縁故者の共同体の維持と継承をめざした。生活行動の目的は自己をモノ・魂・ココロを通じて再生するためにある。

贈答儀礼を表現する生活行動の丹念な繰り返しにより、中田静の所属するコミュニティーの再生・継承・維持が保障されると考えたのである（森田雅子 2025）。

3. 地球観が大変貌を遂げたバロック時代スペインの言語の風合いに見る物語性

大航海時代最盛期を迎えたスペインバロック・黄金の世紀を代表する作家（小説家）Miguel Cervantes Saavedra（セルヴァンテス 1547-1616）と、作家（詩人）の Francisco de

Quevedo(ケヴェード 1580-1645)の全集(1603-1645)を原語で読破し、作風と物語性の風合いを言語感により比較した。彼らは年齢は幾分かちがうが、活動時期は重複している。一般的にセルヴァンテスと並び称される、Lope de Vega(1562-1635)も同時期の一世をきらびやかに風靡した劇作家であるが、ここでは比較の対象としない。高名なアルゼンチンの作家 Jorge Luis Borges(ホルヘ・ルイス・ボルヘス 1899-1986)は *Otras Inquisiciones* 『続審問(1952/2011)』に掲載する随筆“Quevedo”中でケヴェードについて「没後3世紀を経てもなお、スペイン文学の最高の匠であり続ける」(“Trescientos años ha cumplido la muerte corporal de Quevedo, pero éste sigue siendo el primer artifice de las letras hispánicas.”)と称賛している。ここでは”artifice de las letras“を「言葉の操り手」と解釈する。

ケヴェードは、スペインの民謡、歌曲の旋律にのせて、定型詩の様々な形式を駆使し、比喩的な視覚的描写はもとより、音声象徴、擬態的オノマトペ的な操作に卓越している。文面にはことばあそびや登場人物の画趣に富んだ描写が次々と生起する。また、逆に碑文、頌などの詩作も感銘を与え秀逸であり、その作風は平明かつ厳かで深遠である。一方で重厚な人生哲学の教訓、評論、論考は宗教的教義やストア派哲学者セネカ(Seneca 4B.C.- A.D.65)を強く反映している。随想録、寸劇などの雑文では現実風刺もあり、風俗詩作はユーモアと諷刺が横溢しており、比喩、描写は軽妙洒脱、ときには猥雑な風俗にも及ぶ。

しかし言語の表面的操作性は別として、キャラクターの創造、語り口とストーリー性においては、聖書に次いで翻訳言語が多く、世界的名著、近代小説の先駆とされる、ドン・キホーテの騎士物語著者、セルヴァンテスが格段優る。随所に鏤められた、語り部の人生哲学の披瀝まで読み進めると、朗々とセルヴァンテスの声が腹蔵から響いてくる。急転直下、意表を突く場面展開により、読者に認識の瞬間、登場人物の心象変貌をもたらす。ドラマティックな展開は、物語の経緯に、生活行動のリズムや急場を巧みに織り込んでいるからこそ、可能だ。そして戦争、航海、遭難、流浪、恋愛譚、盗難、騙り、闘争、拉致、脱獄計画発覚など、実人生の辛酸を舐め尽くしたセルヴァンテスの提示する虚構と機微により、物語は進み、ついに真理を抉るに至る。静さんがひたむきに拠り所とした、贈答儀礼中心の生活行動の整然とした範疇にあてはまらず、道徳的に除斥された騙り・放浪・闘争・恋愛がセルヴァンテスの物語の急場をつくっている。つまり、**言語により再現された虚構が真理を抉り、登場人物の移動・遊動・騙りを描き、読者に真理と啓発・娯楽を提供している** (*La Galatea* 1585 Alcalá de Henares *El ingenioso hidalgo Don Quijote, de la Mancha* 1605, *Novelas ejemplares*(模範小説集)(1613/1864) *Ocho comedias y ocho entremeses nuevas, nunca representadas* 1615, *El ingenioso Caballero Don Quijote de la Mancha* 1615)。

次年度は戦中の、川西航空機製造の飛行機 紫電改に対する憧憬、いかなごの贈答と共食の文化、鳴尾の戦争体験などのオーラル・ヒストリーや戦争プロパガンダ、反戦運動に纏わる物語・モノに着目してモノと記憶の結びつきを、さらに検証していきたい。

①氏名 株本 訓久 (かぶもと くにしひさ)

②所属 社会情報学部社会情報学科

③専門分野、研究キーワード 日本天文学史、科学コミュニケーション

④ミュージアム資料を活用してどんな研究をしているか、またはこれからしたいこと

現在、学芸員養成課程担当者として、博物館概論、博物館実習 A の授業を行なっている。特に博物館実習 A では理工系博物館で活躍できる学芸員の育成を目指し、プラネタリウムの投映指導を行なっている。今後、実習 A を履修した学生を対象とした星空案内人資格認定講座を開講し、星空準案内人資格取得者と共に鳴尾地域においてプラネタリウム投映や天体望遠鏡工作教室、天体観望会といった科学コミュニケーションの実践的な活動に取り組むことを計画している。

⑤研究紹介用 SNS 等の URL

近世から近代にかけての日本における天文学研究及び天文教育普及に関する科学史的研究に取り組んでいる。特に近世については、岩橋善兵衛嘉孝を祖とする岩橋家によって製作された一閑張望遠鏡の構造の変遷、そして、それらの望遠鏡が日本の天文学に果たした役割について調査している。また、近代については、新城新藏、荒木俊馬、竹田新一郎をはじめとする京都帝国大学理科大学宇宙物理学科の研究者によって行われた理論天体物理学研究及び天文教育普及活動の歴史的意義に関する分析を行っている。また、新城新藏の丙午に関する迷信打破活動について、2026 年 1 月、京都大学人文科学研究所「東アジア伝統科学における自然と人間」研究班において「新城新藏の迷信打破活動」として報告する予定である。

1. 岩橋善兵衛嘉孝を祖とする岩橋家の望遠鏡に関する研究

株本訓久「岩橋善兵衛の八稜筒形望遠鏡の発見」『科学史研究』57 巻 285 号 (2018 年)、20-35 頁。

株本訓久「岩橋家によって製作された 3 点の小型一閑張望遠鏡の発見」『科学史研究』59 巻 293 号 (2020 年)、18-37 頁。

株本訓久「岩橋善兵衛の望遠鏡」『科学史研究』61 巻 302 号 (2022 年)、158-171 頁。

株本訓久「岩橋善兵衛嘉孝によって製作された竹筒製望遠鏡の発見」『科学史研究』62 巻 308 号 (2024 年)、372-382 頁。

株本訓久「岩橋家製中・小型一閑張望遠鏡 12 点の構造及び模様」『科学史研究』62 巻 310 号 (2024 年)、203-220 頁。

2. 新城新藏の研究

株本訓久「新城新藏先生の生涯と活動」『京都大学宇宙会会報 宇宙物理学教室創立 100 周年記念特別号』第 32 号 (2021 年)、32-68 頁。

3. 講演会等

「岩橋善兵衛の望遠鏡」2020 年度 (第 33 期) 科学史学校、2021 年 2 月 27 日

「岩橋善兵衛を祖とする岩橋家製の望遠鏡」第 21 回天文文化研究会、2021 年 7 月 10 日

「新城新藏先生の生涯と活動」京都大学宇宙物理学教室創立 100 周年記念講演会、2021 年 9 月 26 日

「日本のガリレオ・岩橋善兵衛の望遠鏡」国立科学博物館 科学史講座、2024 年 1 月 27 日

近代着物の保存と研究のタネ

近代建築の保存の考え方

現在、建築の外装装飾に使われる凝灰岩の保存について、甲子園会館（旧甲子園ホテル、1930年竣工）を対象として、研究を行っている。甲子園会館の外装には、凝灰岩の日華石と竜山石が装飾や階段、笠木などに使用されている。これらは、風にさらされることで、欠損や剥離などの劣化が進行している。劣化部は、外観保持や安全性の観点からさまざまな修復がなされてきている。気候や材質により異なる劣化の性状を明らかにし、適切な保存修復の方法を検討するのが、研究目標である。

さて、建築石材の劣化部の修復においては、オリジナルと同じ種類もしくは近似した色味の石材での置き換えや、接着材やモルタルなどの別の材料での充填や強化が行われる。このとき、「オリジナル」として保存すべきものが何かを再考する必要がある。

歴史的建造物の保存においては、保存すべきものの基準として Authenticity を掲げ、「形態と意匠、材料と材質、用途と機能、伝統と技術、立地と環境、精神と感性、その他内的外的要因を含むもの（文化遺産の多様性を尊重する世界遺産保護の考え方を示す国際宣言）」を含むものとしている（鈴木 2001）。

近代建築である甲子園会館の外装材の保存修復においては、材料・材質の変更を伴いながら、形態と意匠を保つことを保存の核と考えている。

近代着物の保存と研究のタネ

近代着物資料（武庫川女子大学近代衣生活資料、明治から昭和にかけての着物を中心とする衣類）において、保存の核になるものと関係する研究について考察する。ここでは、歴史的建築の保存の視点をベースにしている。

形態と意匠：着物の形、色柄モチーフなど。研究として、当時の着こなし、現代との比較、当時の流行との関係、洋装と和装。日本文学に見られる着物。AIによる画像分析から、系統立てができる。（生活環境学科、歴史文学科、日本文学科、社会情報）

材料と材質：生地、縫い糸、染料、附属品などの材料。生地や糸の製法、品質も当時の記録と考えられ、研究テーマになる。洗浄方法、保存修復（補彩・補修）の方法、継続的な使用と保存の両立。保管環境の検討。（建築、生活環境（分析）、薬学（繊維系材料）、環境共生、社会情報（デジタル化））

用途と機能：当時の使われ方（季節、用途による着こなし、お下がり、温冷感）、別の着物へのリフォーム、別のものへのリサイクル。使用痕、修復痕、修復に使われた材料。（生活環境、建築、歴史文学・アーカイブズ）

伝統と技術：製法、着こなし。作法。ハレの日の装い。修復（リフォームも含む）痕や修復時の材料、修復方法（補彩・補修）などの記録も、当時の生活様式のヒントとなる。（生活環境、歴史文学、日文、音楽）

精神と感性：保存の経緯、持ち主、思い出、記録（歴史文学、日文、心理）

近代着物を取り巻いて、さまざまな分野での研究展開が期待できる。

参考文献

鈴木博之（2001）『現代の建築保存論』p.9 玉国社

武庫川女子大学附属総合ミュージアム 2025 年度研究報告会

薬用植物園における資料調査等の中間報告（3）

地域社会連携研究部門 奥 尚枝

薬用植物園では、薬学教育や学術研究に活用することを目的に、主に日本薬局方収載生薬の基原植物、民間薬として使用される薬草など、普段は見ることの少ない薬用植物約 250 種類をコンパクトにまとめて栽培している。授業以外に薬剤師の卒後・生涯教育や地域の方々の見学会も行う。薬樹園、温室および寒地性植物栽培室（冷室）のほか、ガゼボハウスなどの憩いのスペースも備え、一人でも多くの方が足を運び、四季折々の植物に触れ、時には香りや味も試しながら、ゆっくり観察できる環境作りを目指している。また、同園が管理する生薬標本室では、今では手に入れることが難しい全形生薬標本を含む約 600 種類の標本や 10000 点を超える腊葉標本を保存している。

（1）薬用植物リストの整理とデータベース化

2023 年度より、派遣職員により所有する薬用植物のリスト作成を開始した。植物の場合、開花または結実の時期（季節）が限られることから、いつでも花や実の写真を検索できるよう、また、その植物を基原とする生薬をリンクさせたリスト作りを目指している。所有植物のリスト入力には完成しつつあるが、昨今の温暖化の影響で開花や結実不良の植物があり写真が不足している植物がある上に、生薬類の撮影およびリンクについては下記（4）の進行の影響から完成には至らなかった。

（2）HP の薬用植物データの整理

上記（1）の作業と並行して、本園の公式ホームページ上にある「薬用植物データ」へのデータの追記および整理作業を行っている。本 HP のデータ作成が古く、また、長期に渡り少しずつ追加作成してきた経緯から、作成時期による情報項目の違いや植物分類の変更などが散見される。そこで、派遣職員により項目の統一や植物の写真の交換等の作業を行ってきたが、現在までに、ほぼ完成しつつある。

（3）種苗提供データベースの作成

薬用植物の種の保存と有効利用を目的とした日本植物園協会の種苗提供データベースに参加するために、所有植物と苗のデータ整備を行いたいと考えていた。一方、本件は植物園の作業員の方の労力を借りることが不可欠な作業であることから、昨今の異常気象による植生の変化により作業員の業務時間が増しており、データ整備まで手がまわらないのが現状であり、本件はほぼ手付かずであった。

（4）生薬標本の整理とデータベース化

派遣職員の指導のもと、漢方同好会の学生ボランティアによるリスト記入と写真撮影を始めたが、学生は実習やテスト期間の合間での実施となること、さらに、劣化した標本の廃棄や保存（取捨選択）を判断できる職員の時間不足で思うように進行しなかった。

(5) 腊葉標本の整理とデータベース化

2024年9月より専門知識を有する派遣職員によるデータ記入と写真撮影を開始し、現在までに約2100点のリスト化を終えた。最も古いものは1919年（大正8年）の標本であつが、100年間以上も状態良く保存されていることが明らかとなった。また、日中戦争中に三木茂博士が中国で採取したと記された標本が数点みつき、戦争の最中どのような経緯で採取が行われたのか興味深いところである。なお、本作業は1日あたり50件程度の整理が限度であるため、全てが完成するには相当な時間を有することが推測される。そこで、今後は、ある程度の手順が確立した時点で、同職員の指導のもと学生ボランティアでの対応に拡大したいと考えている。

(6) 地域連携を目指した活動と資料の一般公開

昨年度、薬用植物園および生薬標本を用いて実施した研修および見学会、ならびに園長として学外で行った講演や授業を以下に示す。年々参加者は増加し、好評も頂けるが、これらが今後の地域社会連携事業に繋がることを期待する。

2024年度 413名（2023年度は260名）

- ・南甲子園公民館講座学習推進委員会講座
- ・兵庫県阪神シニアカレッジ（生きがい創造協会）の実習
- ・生薬・漢方認定薬剤師研修
- ・浜甲子園太極拳同好会研修会
- ・日本メディカルハーブ協会研修会
- ・関西ナードアロマ勉強会
- ・薬用植物スクール（高校生対象、年3回）
- ・一般市民（4月～11月、1～3名程度での自由申込による開催） 127名
- ・本学 附属ミュージアム学芸員過程「博物館実習A」
- ・本学 健康生命薬科学科 理科指導法 III 授業
- ・鳴尾大学講義 「薬用植物のちから」（学外）
- ・宝塚市薬剤師会主催「薬と健康の週間」講演（学外）
- ・兵庫県阪神シニアカレッジ（生きがい創造協会）講義（学外）

以上

文法的知識を生かした中高生の文章読解力および作文能力の涵養

文学部日本語日本文学科 佐藤勝之

中学校段階の国語教育および英語教育において、重きの置き具合や時間の割り具合に違いはあっても、文法、あるいは広く言語事項に触れないことはない。国語科においては、いわゆる橋本文法による「文の組み立て」の説明が長年にわたり行われている一方、英語科では、オーソドックスな文法教育を行うものから、かつてのような文法教育を放棄した実践重視の方策まで、各学校あるいは各教員によって多様性が見られる。

「橋本文法」については、日本語学を専門とする研究者からも、これが内包する問題点がかねてより指摘されてきた。他方、英語教育において、文法的説明を全く行わないことは、英文の読解および表現（作文）に支障を生じているといえる。

こうした現実の問題点を踏まえた上で、どちらも「言語教育」とあるという視点—日本語・英語に共通する文の構成原理という観点—から、両言語の相違も考慮しつつ、より合理的な「文の捉え方」、より実践的な「文と文章の書き方」を探究する試みを行っている。

2017-2023 の科研のプロジェクトでは、国語教育における学校国文法のありようを再認識し、とりわけ言語学の知見の文法教育への生かし方についての理解を深め、論理的な思考力を高める学習材を作成して一応の成果物としたが、現在、「言語教育」の視点からの、より合理的で実践的な方法をさらに研究中である。

研究の概要と現状

2025年10月 歴文 竹内 亮

【研究の概要】

日本古代（主に7～8世紀）の文献史料・出土資料を研究素材として、仏教史、貨幣史、貴族の家産継承などの研究を進めている。

【直近の研究業績から】

論文 竹内亮「行基集団と優婆塞」『日本古代の国家・王権と宗教』法蔵館 pp. 495-513
2024年4月

行基集団の内部構成について、唐招提寺蔵「大僧正師徒各位注録」（師徒録）を史料として検討した。師徒録が記す「侍者（故侍者）」について、その歴名中に和泉郡大領として知られる信厳が見えることなどから、侍者とは行基弟子の優婆塞を指すと見た。また、郡司など地域の世俗社会における有力者が優婆塞として行基集団に多く参加しており、彼らは行基の社会事業を支える中核であったと考えた。

研究報告 竹内亮「日本古代の貨幣―出雲国府跡出土和同開珎銀錢をめぐって」

2024年10月12日 島根県立八雲立つ風土記の丘講座

史跡出雲国府跡から和同開珎銀錢が出土していることにちなみ、銀錢の発行から使用停止に至る歴史的経緯、銀錢発行の目的、銀錢の社会的受容のあり方などについて述べた。隠岐や中国長安などで和同開珎銀錢が見つかった事例などから、銀錢の伝播や普及の実態についても言及した。

論文 竹内亮「大伴氏の家産と田庄」『萬葉集研究 第44集』塙書房 pp. 115-144

2025年2月

『万葉集』に見える大伴氏の田庄（たどころ）を題材に、古代貴族の家産継承について論じた。大伴坂上郎女や家持らが関与した田庄は、大伴安麻呂家の家産として子孫に継承された所領を淵源としており、これらの所領を構成する田地には壬申年功臣としての安麻呂に賜与された功田が含まれた可能性が高いことを述べた。

論文 竹内亮「古代銭貨の成立」『古代文化』77巻3号 掲載頁未定、計8頁予定

2025年12月刊行予定（現在校正中）

古代日本の初期銭貨である無文銀錢と富本錢をめぐって、7世紀後半の貨幣政策と銭貨の流通実態を検討した。銭貨流通の面では、無文銀錢が軽市や難波市で支払いに用いられていたことを木簡の記載から明らかにした。貨幣政策の面では、天武天皇十二年四月の詔によって法定通貨は銅錢である富本錢のみとなったが、その後も根強く流通が続いた無文銀錢を国家はあくまで地金の銀として扱い、銭貨としての地位を公認しなかったと述べた。

2025/10/25

加茂瑞穂

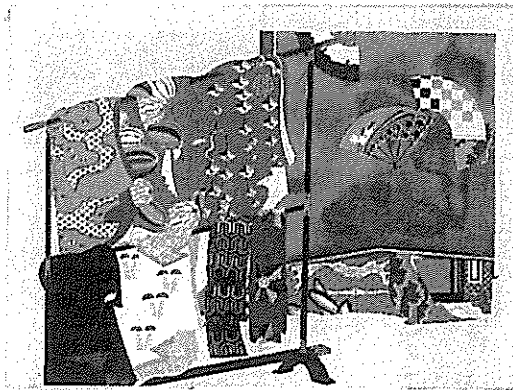
文学部歴史文化学科

明治期図案集の展開について

1. 研究概要

明治30年代から40年代にかけて木版多色摺による図案集が盛んに出版された。また、この時期は復古的な意匠が見直された時期でもある。本研究では、明治期に刊行された図案集の所在情報も含めて整理しつつ、明治30年代から40年代に焦点をあてて、復古的な意匠の見直しと新たに加えられていくアレンジを考察し、図案の受容と展開について明らかにしている。

2. 研究の経過



下村玉廣『元禄風流明治振』明治38年
大英博物館蔵

© The Trustees of the British Museum

案が描かれた。

上記の研究成果を踏まえ、今年度は別の図案集について詳細な調査、考察を進めている。

2024年度は「図案集における復古的な意匠とその展開—明治38年刊『元禄風流明治振』を中心に」と題して、論考をまとめた。明治38年は三越から「元禄模様」が売り出され、和装品に江戸時代前期を彷彿とさせる大柄な意匠がさまざまに表現された。こうした動きに呼応して出版されたと考えられるのが『元禄風流明治振』などの図案集であり、和装品だけではなく図案集においても復古的な意匠が求められた。しかし、明治38年に描かれた図案は、新たなアレンジが加えられ、江戸時代の意匠を消化して新たな時代に相応しい図

3. 今後の展望

明治期に創業した美術出版芸艸堂は、図案集を数多く手掛けた出版社であり、現在も木版印刷を手掛けている。芸艸堂には明治期に刊行された図案集の板木や原稿なども残されているが、未整理の資料も数多い。今後も情報交換を継続しながら図案集の調査・研究を進めていく予定である。

近年の研究活動について

鎌田誠史

附属総合ミュージアム 研究員

1. これまでの研究活動と成果

(1) 学術研究

今年度から科学研究費助成事業、「南西諸島人々の一生を包む独自の生存領域「シマ」の空間秩序及び形成原理の復元的研究」(基盤研究C・令和6-10年度)が採択され、その研究代表者として研究をスタートさせた。この研究は今まで行ってきた南西諸島の研究蓄積をベースとしている。

研究内容は昨年度に報告した通りであるが、若干の変更があった。研究を進める中で大きく進展があった点として、とくに沖縄本島の中部地域における近世期に成立したとされる集落郡の空間構成において大きな発見があった。

近世期の農業政策において成立した近世村落の空間形態において、1600年代に政策的に広がったウージ(サトウキビ)の栽培に特化して近世的な合理性で極めて計画的に成立した村落と稲作を残しながら近世期の農業的改革に対応した村落の空間的特徴の明確な違いを明らかにすることができている。さらにこのような稲作型の村落からウージ型の村落に移動する際の規則性が明らかになりつつある。これは先行研究で検討されてきた近世村落の成立に迫る研究成果と言える。今後は研究対象を沖縄本島の中部地域から南部や北部に広げながら研究を進めていく予定である。

2. 今後の研究計画

上述した研究を進めるなかで、このような研究成果を地元のシマづくり(沖縄地方ではムラのことをシマと呼称する)に還元する時期に来ていると考え始めている。今年度は最初のアクションとして、沖縄本島で活動しているシマづくりプロジェクトを始動している。

産官学連携事業一沖縄・奄美「まち・しま」の未来構想プロジェクト(仮)一南西諸島における「生存」を基軸とした集落デザインの方途探索に関する研究計画

1. プロジェクトの理念と背景

南西諸島(琉球弧)は、かつて九州と連結し

ていた一連の島々であり、独自の前近代国家を形成し、日本本土とは異なる固有の文化、特に島々の風土を背景とした民俗文化と居住文化を育んできた。この地域は、温暖な自然に恵まれる一方で、台風、マラリア、生活水の確保の困難さ、農業に適さない土質といった厳しい自然的制約に直面してきた。先人たちは、これらの環境を克服し(対応し)、自らの生存領域を確立するための独自の居住文化を形成したのである。

しかし、近年の気候変動や人口減少は、この固有の民俗文化や居住文化を急速に失わせている。さらに、今後想定される災害や社会情勢の変化は、南西諸島の人々の「生存」そのものを危機に瀕させる可能性を無視できない。例えば、稲作からサトウキビ中心に変化した沖縄の農業は、現在の人口を支えるには厳しい状況にあり、食糧供給という観点からも本土以上に深刻な事態に直面しうる。

このような背景から、災害多発が懸念される現代において、「生存」という観点から南西諸島の民族文化・居住文化を再評価する時期が来ている。本プロジェクトは、厳しい環境下で先人たちがプリミティブな環境をいかに理解し、構築してきたかという点に着目する。災害発生想定をも組み込んだ生活空間の根本的な再構築に繋がる営みとして、南西諸島の環境観を再評価し、小さく生き抜く地域をつくるための「生存」の集落デザインの方途を探ることを究極の目的とする。

これまでの研究は、個別の専門分野や地域で進められ、地域づくりの実践者との連携も希薄であった。したがって、本プロジェクトでは、研究蓄積の統合に加え、研究と実践の協働による検討を不可欠とする。

2. プロジェクトの目的とビジョン

本プロジェクトは、「単なる地域づくりや環境づくり」に留まらず、南西諸島の未来の社会を形作るための「住まい方」のモデルを産官学の連携により提案する。

具体的な目的は、学術研究の蓄積、沖縄の景観形成を担ってきた実務メンバー（株式会社国建など）、および自治体などの公的機関が緊密に連携し、以下の課題に取り組むことである。

沖縄・奄美の離島地域における持続可能な「住まい方」と地域づくりのモデル提示。

米軍基地返還後の、歴史や文化を継承した持続可能な環境づくりへの提言。

これまで個別に進められがちであった研究を統合することで、新たな村落研究の地平を切り開き、その成果をもとに島々に適応する集落景観づくりのモデルを提案する。これにより、急速に失われつつある環境形成技術の固有価値を活かした集住環境再構築の実践に還元できると確信している。

具体的には、島嶼社会における自然環境に対応した集住環境のダウンサイジング（コンパクト化）や、島嶼型減災に備える「リスクリダクション（危険低減）」、歴史的景観に配慮した景観形成への方途を提言するための基礎データベースを構築することをビジョンとする。

武庫川女子大学 学部・学科を超えた研究・プロジェクト展（仮）

附属総合ミュージアムの展示事業や女性活躍総合研究所の事業一環として、下記のプロジェク展を企画している。

1. 提案者

建築学科： 宇野 朋子
生活環境学科：鎌田 誠史、竹本 由美子、伊丹 康二
社会情報学科：和泉 志穂
歴史文化学科：河野 未央
経営学科： 山下 紗矢佳
薬学科： 吉田 都

2. 展覧会コンセプト

本企画は、「次世代につなげる『知』の共創：対話を通じて未来を創造する」をコンセプトとする、対話型の展覧会である。建築、生活環境、社会情報、歴史文化、経営、薬学といった多岐にわたる分野の教員が提案者となり、武庫川女子大学の研究成果を学内学生・教職員および地域社会と共有することを目的とする。単

なる研究発表に留まらず、研究者と参加者が直接対話することで、学科の枠を超えた新たな研究テーマや未来の協働プロジェクトの種を共に創造（共創）することを目指すものである。

ターゲットと期待される効果

主要ターゲットは、本学の学生・教職員、地域自治体・企業関係者、地域住民・中高生である。本展覧会は、学内に対しては分野横断的な連携や大学院進学のきっかけを提供し、学外に対しては共同研究の発掘や、オープンキャンパスと連携した本学の研究力のアピールを目的としている。

展示内容と推進体制

展示は、地域連携研究と最新研究の二つのテーマに分かれた、約50点から70点のインタラクティブ型研究紹介パネルを中心に構成される。本学の研究重点テーマ（教育、健康、女性活躍）など、共通キーワードに基づく展示も行われる。展示形式の最大の特徴は、多数の教員、大学院生、大学生がパネルの前で来場者と直接対話を行う学生参加型である。展示場所はIR館1階またはKM館2階ラウンジを予定している。

関連イベント

研究成果の社会貢献の可能性を議論する「次世代との対話」をテーマとしたフリートークセッションを設ける。また、特定の専門分野の深さをアピールするため、生活環境学科全教員による研究展の巡回展も実施する計画である。本企画は、大学の研究蓄積を社会に開かれた形で提示し、未来に向けた「知の生態系」を構築する重要な取り組みである。

謝辞

武庫川女子大学 学部・学科を超えた研究・プロジェクト展（仮）は、附属総合ミュージアムの企画にて実施することに加えて、ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（女性リーダー育成型）事業での女性研究リーダーを目指す研究者の成果発表の機会としても活用する。附属総合ミュージアムをはじめとする学内関係者に多大なサポートを頂いている。学内の関係者の皆様に、記して感謝したい。

「デジタルアーカイブ」という言葉は現在身近なものとなって久しく、ミュージアムを取り巻く状況においても重要なキーワードとなっている。令和4年(2022)に成立した「博物館法の一部を改正する法律」により、法律において、「博物館資料のデジタルアーカイブの作成と公開」が博物館事業として新たに位置づけられた。それにともない、文化庁では令和4年度から「Innovate MUSEUM 事業」を立ち上げ、様々な取り組みに対して助成を実施している。当館ではこのたび、「博物館収蔵資料デジタルアーカイブ推進事業」(三次募集)に申請し、9月2日付で採択を受けた。本発表では、改めて博物館における「デジタルアーカイブ」について概観したうえで、当館の取り組みと課題について検討したい。

そもそも「デジタルアーカイブ」とは、デジタル技術を用いて作成されたアーカイブ(記録と保管)を意味する造語で、1994年頃に月尾嘉男東京大学名誉教授が提案したとされている。インターネットの普及とともにデジタル技術は革新を遂げ、AI技術も日々進化し続けている環境にあるが、博物館業界の対応はやや遅れをとっている状況にある。これは、デジタル化やアーカイブの蓄積・公開への取組に対して予算・人員などが十分でなかったことや、「博物館資料を活用する」ということ自体への制約など、様々な要因があげられる。しかし、2011年の東日本大震災やコロナ禍を経て、デジタルアーカイブへの取組は活発化しており、先述のように改正博物館法にも取り上げられることとなった。

「デジタルアーカイブ」において重要なことは、デジタル方式で記録したものを保存・蓄積することにとどまらず、「誰もが検索可能」な状態にすること、「世界中からデータにアクセスし、閲覧できるようにする」などが挙げられる。したがって、ただデジタル化すればよいわけではなく、だれもがアクセスできるデータベースにし、限られた研究者ではなくどのような人でも検索が可能な状態にすることが求められている。このたび当館が採択された「博物館収蔵資料デジタルアーカイブ推進事業」でも、データベースを公開したうえでジャパンサーチや文化遺産オンラインと紐づけすることが求められており、この事業をとおして、当館の資料を広く世界的に公開することが必要とされている。

このたびの助成を受けて、現在当館では「中田家資料」と「民具資料」についてのデジタル化をすすめている。特に民具資料については、すでに旧資料館時代の紙媒体の台帳の内容・データベースに登録されている内容・実際のモノ資料に付属している情報に齟齬がみられるものがあり、デジタルアーカイブとして今後活用していくうえでの課題が浮上してきている。これまでの資料収集や整理の経緯もふまえたうえで、館内外の多くの人に広く活用してもらえるデジタルアーカイブとして公開していくために、データベースのあり方や活用の仕方について検討し、よりよいものを継続的に活用していけるように課題を共有したい。

研究の概要など

氏名 大高 幸 武庫川女子大学附属総合ミュージアム共同研究員

所属 放送大学

専門分野 博物館教育論 芸術メディア論

最近の研究の概要

博物館教育論に関する仕事や美術館での鑑賞・制作プログラム実施・調査などの合間に、2000年以來、細々と研究してきた近代日本の和服の戦争関連柄の研究に関して、2024年夏に立命館大学国際平和ミュージアムで、『昭和初期の和服柄に宿る戦争』展を、同館に認可された市民公募展として実施しました。その準備段階で、実物に触れた経験がない人絹（スフ）といった素材などについて横川公子先生にご助言をいただき、大変勉強になっております。

2025年7月の国際美術教育学会(International Society for Education through Art: InSEA)で、この展覧会の来館者アンケートの分析結果を発表しました。アンケート回答には、こうした柄の存在への「驚き」や「怖れ」、現状そして未来を考える上での展示資料の歴史的価値への評価が頻繁に記されていました。

武庫川女子大学附属総合ミュージアムの登録有形民俗文化財をはじめとする素晴らしいコレクションにも関連するさまざまな資料が存在し、それらが保存されていることをありがたく存じます。

これから研究すべきことだらけですが、これらの和服柄が表した英雄たちの物語とその意味合いを当時の文脈の中でさらに研究しているところです。

利水の「原点」と「連鎖」―鳴尾の水資源についての試論

武庫川女子大学附属総合ミュージアム 黒田 智子

自らの命を保つということは、身体にこれまでどおりの体温と水分が保たれているということである。そのために、人間は、自然界から火（エネルギー）と水を適切な方法で摂取し続けなければならない。その事実を認め感謝する心の状態は、現代人の日常には意識されないが、実は太古に人類が捧げたであろう祈りの心に原型があると考えられる。

狩猟や農耕の初期において、人類は、**大自然や神、亡くなった祖先の霊**に対して、**敬虔な祈りの心**を持ったであろう。同時に、体温（エネルギー）と、血液や汗・涙のような体液（水分）とを、生きるために欠くことのできない**火と水と同質であるがゆえに一体**であると実感することだったのであるだろうか。そして、その実感の元を自然からもらい、その方法を祖先から受け継いでいることへの感謝と喜び、さらに子孫のために未来も変わらぬ安寧を願い希望をもつ、そのような心の在り方としての祈りであったと想像される。本研究では、このような**火と水についての祈り**を「**原初の祈り**」と呼ぶことにする。

さらに「原初の祈り」には、自然界の火と水を適切な方法で人間の側に引き寄せて命を繋いでいく**道具と言葉の存在**があることに注目したい。**人間と道具および言葉の関係**は、他の生物の事例とは根本的・本質的に異なっている。例えば人間は、火を使う動物ともいわれるが、道具と言葉によって火だけでなく水をも高度に活用し、他の追従を許さない規模で自然に働きかけて今日に至る文明を築いた。その過程で道具制作のために繰り返された試行錯誤の背景には、**補完的、相乗的、構築的にはたらき記憶と思考を言語化する言葉の存在**がある。それによって世代を越えて伝達された蓄積された情報は**道具を進化発展させた**のだ。本研究では、火と水についての「**原初の祈り**」に密接した**道具と言葉**をまずは**道具と言葉の「原点」**と呼ぶことにする。

かつて人間は、**生業と結びついた地縁・血縁**の中で信仰と習俗を共有し、生活と結びついた祭祀・年中行事・芸能などにおいて、深淺の別はあっても「**原初の祈り**」へと**回帰する仕組み**を持っていた。しかしながら、現代人は、近代化の過程で地縁・血縁関係の消失と共にその仕組みを失い、大災害や戦争による生命の危険、勉学による知識、芸術による感動などを扉として断続的に「**原初の祈り**」への回路に触れるのみである。

一方、道具と言葉によって、人間は、太古には想像もつかなかったような火と水の利用法を進化・発展させた。そして、血を流し、命を犠牲にしても、科学技術の追求と競争は留まることが無い。火と水の利用が戦争や環境破壊に向かう現実には、意識されているか否かに関わらず、その根本に、一部の人間が生き残るという境界線において、**利己または自利の心**が存在するといえる。「**原初の祈り**」における自然・祖霊に対する敬虔さや、感謝・喜び・願い・希望の分かち合いをもたらしのは**利他の心**といえる。一方、近代以降、人間の利己の心からくる活動は**地球の許容範囲**を超えた。そうであるならば、この**2極**を**人間の本質として認め**たうえで、現在生活美学研究部門甲子プロジェクト研究会としては何をすべきなのか、鳴尾という足元から、特に水に着目して考えていきたい。

昭和における和裁士の仕事と和裁文化
—和裁士からの聞き取りを通して近代衣生活資料を考える—

共同研究員 小林政子

はじめに

武庫川女子大学附属総合ミュージアムが所蔵する近代衣生活資料は着物資料が大部分を占めているが、家庭で縫われたものと、教材として縫われたものと、職人の手によって縫われたものには大きな違いがある。博物館では一般的に、近代の着物の縫製に注目されることは少ないこともあり、本稿では、着物資料を背景から理解するため、作り手である和裁士の仕事や和裁文化について取り上げる。高度な技術保持者の高齢化と継承者の減少により、和裁自体が衰退しつつある現状も踏まえ、和裁士に関する記録も残したいと考え、聞き取りを行っている。和裁士が五感を通して感じたことや、細部の技術や工夫の詳細等について、生きた言葉を捉えることを試みている。

方法

大正または昭和前半生まれの和裁士で、長期間、職業として和裁に携わってきた関西在住の4名の方から聞き取りを行い、内容を表にまとめた。変化がわかりやすいように、和裁の修行中と独立後に分けて、着物や縫製の変化や、工夫した点、苦労した点など、自由に話してもらい、和裁に携わった時期の早い順に時系列に並べた。

結果

戦時中には、和裁士までが軍服を縫っていた。少なくとも神戸では、戦時中でも和裁士の仕事がなくなることはなかった。昭和30年代は着物がよく売れて、神戸の花隈など飲み屋の多い繁華街の傍で着物文化が繁栄していた。

着物の変化では、胴裏が赤い紅絹からピンク、白への変化や、銘仙や茶羽織や黒の絵羽織が廃れ、お召しや喪服も減少した。そして上着の道中着が増え、上着の丈が長くなった。

縫製の変化では、裾の縫い方の簡略化が見られた。長襦袢の裾は、長着と同様の難しい縫い方から、裾を裏側へ折り返すだけの簡単な縫い方への簡略化が見られた。また留袖の裾は、元々綿を手でよって入れていたが、既製品の裾綿を入れるようになり、次第に綿自体を入れなくなった。その他にも部分的にグシうちの省略や袖付へのささどめ（表から小さな補強布をくるむように縫い付けたもの）の省略が見られた。

聞き取りを行った和裁士は主に百貨店や呉服店の仕事をしており、新品を縫うことが多く、修繕は習ったことも教えたこともなかった。汚れや傷み防止策である裾へのレース等の縫い付けも、ほとんど経験がなかったが、母親がしているのを見たことがあった。

縫製の工夫では、長着の袖口の口下において糸一本分という細かな点でこつを教わったり、羽織を解いたときに閃いた直線縫いを減らす方法を試行したりする事例があり、基本を踏まえた上で個人による独自の工夫が見られた。

むすび

当館の着物資料には、修繕や継ぎ接ぎが施された着物が多くあるが、修繕は、百貨店や呉服店の仕事を請け負っていた昭和30年代以降の和裁士の仕事には含まれていなかった。裾にレース等を縫い付けていたのは家庭で行われ、少なくとも和裁士の母親世代である明治40年代生まれの女性にとって珍しいことではなかったことがわかった。

聞き取りからは、縫製の簡略化が見られたが、着物が特別な衣裳になり着用回数が減ったことで、裾などが傷みにくくなったことと、着物がよく売れた時期で、効率を上げていく必要性があったことが一因である可能性が高い。

さらに縫製の工夫では、裁縫書にはあまり載っていないような、和裁士個人の方法や工夫があることが示唆された。家庭で縫われたものは、裏側などは人に見せるものではないため色々な痕跡がわかりやすく残されていることが多いが、和裁士が縫った着物資料は、商品として納めるため特に見えにくい場所に工夫や技術が隠されていることが多い。和裁士が縫った着物資料は、その点を念頭に置いて観る必要がある。

金光図書館蔵「井上式地歴標本」について

附属総合ミュージアム共同研究員・伊永 陽子

近代学校教育で用いられた教育標本「井上式地歴標本」には歴史的服飾を表す人形があり、「有職人形」と同種の服装の標本といえる。これまで進めてきた「有職人形」に関する研究は継続しつつ、「有職人形」に比して、幅広い時代と身分で展開し種類も多く、事例数も多いと見込まれる「井上式地歴標本」を対象とし、標本の製作意図や教育の実相、背景にある社会的文化的事象との関係性を検討していきたい。

近代学校教育では直観重視の教授法として、掛図や標本などを用いて教育が行われた。

「井上式地歴標本」は、井上清助によって改良された博多人形（土人形）が、明治40年頃に新たな販路を見出す中で人類学者・坪井正五郎に採用され確立した。島津製作所標本部が出した『地理及歴史学用標本目録』（島津源藏編、大正3年（1914））には、地理学用標本ページに「人種及風俗」として坪井などが選定した人種模型が掲載される。一方で、国文学者・関根正直などが選定した歴史学用と思われる「井上式地歴標本」もあった。

歴史学用「井上式地歴標本」については、先行研究として「世界と日本の風俗人形一元祖博多人形一」（金光図書館編『土』118号、1987年）があり、教育標本として比較的早くから知られている存在であった。また、幡鎌真理「天理参考館所蔵「井上式地歴標本」について」（『天理参考館報』31、2017年）では、坪井正五郎によって「井上式地歴標本」が確立した経緯や坪井と関根正直の接点などに検討が及んでいるが、歴史的服飾を示す標本の製作意図やその背景にはあまり触れられていない。地理学用の人種模型に関する論考ながら、「井上式地歴標本」の変遷を詳しく述べる平田健・村野正景「博多人形師の作った人種模型標本—井上式地歴標本—」（村野正景編『学校博物館を成長させる—京都市立鴨沂高等学校所在資料の発見と活用Ⅱ』2023年）も重要である。これらの所蔵機関のほか、各地の大学などにも所蔵されることが知られるが、歴史学用「井上式地歴標本」でもっとも多くの点数71体を所蔵するのが金光図書館（岡山県）である。

金光図書館への訪問調査は終えており、2024年度秋季展「女子学生は何を学んだのか」においても取り上げた。歴史学用と地理学用合わせて182体という国内最大規模の金光図書館蔵「井上式地歴標本」（類似品も含むか）の伝来やその性格、現状を、共同研究者横川公子氏・佐藤優香氏とともにミュージアム『紀要・年報』6号において報告をする予定である。伊永は歴史学用について主に執筆する。

今後は、金光図書館以外の所蔵調査を経て、歴史学用「井上式地歴標本」の種類の内容を把握し、人形がまとっている服飾を比較分析することで製作の姿勢や展開、年代などを読み解いていきたい。また、関根正直の服飾・風俗・有職故実面における活動を追い、人形に表された歴史的服飾のデザインソースを特定し、最終的には標本の製作意図とその背景を明らかにしたいと考えている。

坪井正五郎・松村瞭選定「井上式日本帝国人種模型標本」の背景を探る
—近代教育メディアにみられる東京人類学会ネットワーク—

佐藤優香

人類学者の坪井正五郎と松村瞭が選定を行った井上式人種模型標本は、明治の終わりから昭和初期にかけて博多人形製作者井上清助の工房において製作された地理学習のための教材である。現在、国内各地の大学博物館等に収蔵されていることが確認されつつあり、国立台湾博物館では台湾総督府博物館旧蔵資料のうち 13 体が展示されている。島津製作所標本部編『地理及歴史学用標本目録』大正 3 年版には、人形の他にも胸像や陶版などいくつかの異なる形状のものが掲載されている。加えて、井上式の模型には「歴代復職模型」もあり、同目録には布製装束で服飾を表した「中古装束人形」*も掲載されており、当時、人形形態の教育メディアが多様な展開をしていたことがわかる。

井上式標本の人形は、素焼きにとっても細やかに彩色が施されており、顔つきも繊細な表現となっている。服装や装飾品はどの程度の正確さを有しているのか。表現されている外見に「間違い」がないのであれば、綿密な調査による精度の高い情報を得て製作されていることが想定され、その表情は具体的なモデルの存在の可能性さえもうかがわせる。製作の過程において、8 種類の「人種」の正確な服装と個性を表現するに足る情報は、どこから提供されていたのだろうか。

今年前半期は、井上式模型標本から「日本帝国人種模型」を取り上げ、その背景資料を明らかにすることを目指した。昨年度に調査を実施した金光図書館所蔵資料を具体例として観察を行った。島津製作所標本部の目録によれば「日本帝国人種模型」は、「内地人、琉球人、朝鮮人、アイヌ人、台

* 本学には京都府立女子専門学校旧蔵の資料が収蔵されている。

湾人、台湾蕃人、ギリアック、オロッコ」(ママ)の男女1組16体で1セットになっている。金光図書館所蔵資料は、この16体に加えて子どもの男女16体を含む32体で構成されている。

坪井と関わりのあった人類学者の調査活動や古写真等を追ったところ、現在までの調査から、台湾漢民族と日本内地以外についてはおおよそのモデルが明らかになった。アイヌの子ども2体、ギリアック、オロッコは『財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構 収蔵品目録7 石田収蔵旧蔵写真』に掲載されているものにモデルが認められた。すなわち、石田収蔵が坪井らと行った樺太調査の際に撮影したものであることがわかった。琉球については、『東京大学アジア・ミクロネシア古写真資料画像データベース』にモデルと思われるものがあり、調査者として鳥居龍蔵が想定された。台湾の原住民については森丑之助の『台湾蕃族図譜』にモデルが認められること、伊能嘉矩の『伊能嘉矩所蔵台湾住民写真集』にも同様の写真があることから、森が撮影し、伊能も監修に関わったことが予想された。朝鮮については当時販売されていた絵葉書に類似写真があるものの撮影者は不明で、台湾の漢民族と日本内地人についてはモデル写真の発見には至っていない。

ここまでの調査から、人形製作には、坪井とその弟子たちによる調査成果が活かされてきた背景が見えてきた。また、これらのモデル写真は教科書にも使用されており、当時の教育メディアには東京人類学会のネットワークによる情報が多方面に提供されていたことが予想される。

本研究は、2021-2024年度の科研「旧制女子教育機関所蔵『有職人形』を中核とした近代女子教育と皇室文化の研究」(代表伊永陽子)の成果を引き継いで実施した調査である。

中国北朝仏教造像における香炉を頭上で捧げるヤクシャ像の類型研究 —崑崙奴図像の祖形を検討する一助として—

平 法子

(武庫川女子大学附属総合ミュージアム共同研究員)

中国南北朝時代において、単独石仏造像の下層部や台座の中央に、「童子」、「力士」、「小人」、「地天」などとも称される、大型香炉を頭上で捧げるヤクシャ像が散見される。この種の像は、半身あるいは全身の上半身裸形で表され、単数あるいは複数の場合がある。これらとよく似た造形のヤクシャ像はインドにも見られ、「侏儒形ヤクシャ」ともいわれるが、それらは背が低く巻き髪で、太鼓腹の幼児体型をなすという特徴を呈する。このような外見的特徴は、成都万仏寺出土の梁代造像台座に配された供養天群像中の合掌形の侍従像にも取り入れられているがⁱ、この侍従像は崑崙人像であるとも指摘されているⁱⁱ。

崑崙人とは、林邑以南の国々を総称した「崑崙」地域に居住する民族で、特に中国で奴隷として使役されたものを「崑崙奴」という。仏教美術においては、巻き髪で肌の色が黒いという身体的特徴に加え、上半身裸形に条帛、下半身に短裙・腰巻を着用し、耳環、瓔珞、腕釧・足釧等で身を飾り、裸足で表されている。とりわけ中国唐代の維摩経変相図や騎獅文殊図・騎象普賢図の中に見られるが、大衆を先導する者として、大きな蓮華型の置香炉を頭上で捧げる姿で描かれている。従来、崑崙奴とヤクシャの図像上の影響関係については、浅湫毅氏により、侏儒形ヤクシャの形式を踏襲した薬師寺金堂本尊台座の異形像が、唐代の巻髪邪鬼像の系譜上にあるものとして、崑崙奴の身体的特徴を取り入れて成立したと指摘されたⁱⁱⁱ。また拙稿においても、維摩経変相図中の崑崙奴が、香木山や香炉などを持物とする点に着目し、その役割とそれらが図像上において結合した背景について論じたことがある^{iv}。しかしながら、香炉を頭上で捧げる崑崙奴図像の成立過程については、未だ明らかにされていない。

そこで本研究では、香炉を頭上で捧げる崑崙奴図像の祖形を、南北朝時代の仏教造像に見られる同形のヤクシャ像に求め、その図像成立の背景を明らかにすることを目的とする。これまで報告者は、北朝地域（華北）の作例を中心に、北魏の都があった河南省洛陽や、東魏・北齊の都があった河北省鄴城の周辺に分布する仏教造像を調査してきた。本報告では河南省と河北省の現地調査に基づき、北魏後期から東魏・北齊期の香炉を捧げるヤクシャ像に4類型があることを提示したい。

ⁱ 鄭禮京「北響堂山石窟における裸体形菩薩像の源流について」（『研究紀要』第14号、京都大学文学部美学美術史学研究室、1993年）を参照。

ⁱⁱ 歩連生「試論我國古代彫塑的崑崙人及其有關問題」（閻文儒・陳玉龍編『向達先生紀念論文集』、新疆人民出版社、1986年）を参照。

ⁱⁱⁱ 浅湫毅「薬師寺金堂本尊台座の異形像について」（『佛教藝術』第208号、1993年）を参照。また、永井信一「アトラス(Atlas)とクハンダ(Kumbhanda)—仏教美術にあらわされたものを主にして」（『女子美術大学紀要』第10号、1980年）において、インドで侏儒形ヤクシャと土着神クハンダ（クバンダ）が混同視され、同像は中国化されたクハンダ像の系譜にあることが指摘されている。

^{iv} 平法子「先導する「崑崙奴」の図像的役割について—敦煌維摩経変相図の世俗人物群像を中心に」（『仏教芸術』第8号、2022年）を参照。

研究報告

泊里 涼子

昨年度に引き続き、木材の意匠性をテーマとした実践的研究の位置付けで、樹種の特徴や個体差による木目や色味等の差異に着目した作品を制作した。完成作品はグループ展（企画運営にも参加）にて展示発表をおこなった。

【展示会要旨】

第15回 座る・くらべる 一脚展 + 2025

「椅子ともうひとつのかたち」

日時：2025年9月2日（火）～15日（月・祝）

会場：竹中大工道具館 1F ホール

主催：一脚展実行委員会 公益財団法人竹中大工道具館

協賛：株式会社三栄 株式会社中橋製作所 鈴木木材株式会社 竹内機械株式会社

東洋商工株式会社 SHAREWOODS. 誠文堂新光社 TIMELESS 桧皮椅子店

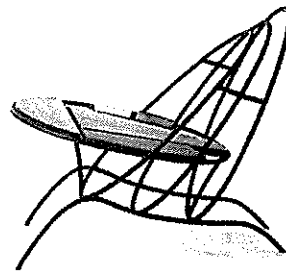
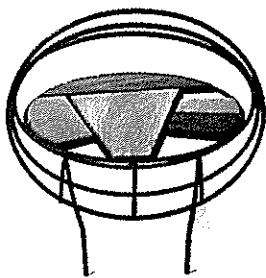
協力：（資料提供）兵庫県農林水産部林務課木材利用班

後援：兵庫県 神戸市

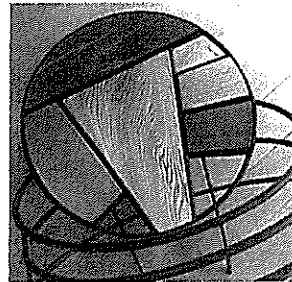
内容：兵庫県内で活動する木工作家達がそれぞれの新作椅子を発表する毎年恒例の展覧会。今回は一脚展が継続してきた地域材への取り組みを「もうひとつのかたち」として表現。椅子に寄り添う様々な「ひょうごの木」の作品が会場を彩った。

※「ひょうごの木」とは、兵庫県の森林に生息する樹木、そこから生産される丸太や木材などの総称。

作品名：「円×円」



樹種： 樺、胡桃、山桜、ウォールナット、鉄
仕上：オイル仕上げ（木材）ラッカー仕上げ（鉄）
サイズ：W630 × D700 × H630 (SH350)
制作意図：座面を全て樹種の違う木材で構成し、さらに鉄材と組み合わせることで、木材の表情の特性に着目してもらうことを意図しデザイン、制作した。



シカゴ万博に日本が出品した裁縫教育資料

附属総合ミュージアム共同研究員

樋口温子

【研究の背景】

2022年に米国イリノイ州シカゴに移り住んだことを契機に、1893年（明治26）のシカゴ万博（World's Columbian Exposition）に出品された日本の染織品について関心を持ち始めた。これまで、シカゴ万博に出品された染織品に関する研究は、美術部門（K区）に出品された、いわゆる「美術染織」を中心に論じられてきており、他の部門での出品物の情報は、各研究者の関心に応じた部分的なものであった。

本研究の目的は、シカゴ万博全体を通じた染織品に関する記録を改めて参照することで、「美術染織」だけでない当時の染織界の側面を明らかにすることである。2023年度は、研究の基礎づくりのため、米国で作成されたオフィシャルカタログ¹を参照し、出品された染織品の全体像を把握・整理し、研究ノート「シカゴ万博に出品された染織品の諸相-英文目録の調査を通して-」（ミュージアム紀要4号）にまとめた。ここでは、鑑賞用の刺繍作品が、K区（美術）だけでなく、H区（諸製造品）やL区（心芸）、婦人館においても出品されていたことなど、新たな知見を得た。ただし、本調査を通して、オフィシャルカタログの改訂が何度も繰り返されていたことが判明した。同じタイトルのカタログであっても内容が異なる場合があり、発行日や版番号の記載はないため、判別は内容に依る他ない。より多くのカタログの内容を確認し、日本がシカゴ万博に出品した染織品の内容を明確にすることが課題となった。とくに、裁縫教育の成果が展示されたL区（心芸）のカタログ Part XIは、日本の文部省が出版した目録²と大きく内容が異なっていた。

2024年度のシカゴ美術研究所附属ライアソン・バーナム図書館（ARTIC）、およびシカゴ公共図書館ハロルドワシントンライブラリー（CPL）の所蔵本の調査においては、L区（心芸）の目録 Part XI について、新たな版（第2版と推察）を確認できた。しかし、日本の出展品の内容は、前年に調査したミシガン大学所蔵のもの（第1版と推察）と同じ内容で、日本の文部省が出版した目録との齟齬は解消できなかった。

今年度は、裁縫教育の成果が展示されたL区（心芸）の内容を把握することを優先課題とすし、ARTIC やシカゴ歴史博物館などに所蔵されている当時の写真や文献の調査を進めることとした。

¹ *World's Columbian Exposition 1893 Official Catalogue*, W.B.Conkey Company, 1893.

² *Catalogue of objects exhibited at the World's Columbian Exposition Chicago, U.S.A., 1893*. By the Dept. of Education, Tōkyō, Japan, 1893, Dept. of Education, 1893.

【調査報告】

シカゴ美術研究所附属ライアソン・バーナム図書館(ARTIC)、シカゴ歴史博物館のデジタルアーカイブから、Liberal Arts Buildingの展示の写真を参照しているが、日本の展示資料がはっきりと写っている写真は見つからず、難航している。

【今後の課題】

文部省カタログに載っている共立女子大学等、学校側の記録や資料にあたることで、日本が出品した裁縫教育資料の実態を検証する糸口が見つかるかもしれない。将来的には、京都府立女子専門学校旧蔵の昭和初期資料との比較を通じて、明治期との教育的・文化的な連続性と変化について考察を行う。

| Department | 出品項目* |
|------------|---------------------|
| A | 農業、森林産物、林業、其器械及使用品 |
| B | 葡萄栽培、園芸、育花 |
| C | 動物、家畜及び野生動物 |
| D | 魚類、漁業、製造品及漁具類 |
| E | 鉱山、採鉱術、冶金術 |
| F | 機械 |
| G | 運搬法 鉄道、船舶、車輦 |
| H | 諸製造品 |
| J | 電気及電気器具 |
| K | 美術 絵画、彫刻、造像及裝飾 |
| L | 心算 教育、土木、公共作業、音楽、文芸 |
| M | 人種学、古物学、工作及発明進歩 |



JAPAN

Hubert Howe Bancroft, *THE BOOK OF THE FAIR Volume.2*, Chicago, The Bancroft Co, San Francisco, 1893.

ミュージアムにおける今年度博物館学外実習受け入れの報告

ミュージアムが所管する博物館学芸員課程の授業には、博物館実習 A（学内の実習）と B（学外の実習）がある。B の学外実習は、実際に博物館等施設に出向いて学芸員の職務を体験する科目であるが、今年度当ミュージアムでは 9 月 8 日から 12 日の 5 日間、学外実習先として実習生 6 名を受け入れた。

今年度の実習では、IR 館 1 階常設展示コーナーの展示計画を中心に、資料整理、広報に関わる業務を計画に入れた。また文化財保存班の防虫防カビに関する勉強会に参加した。昨年度までは 5 日間の課程を学芸員 2 名で対応したが、今年度は展示、保存、広報などそれぞれ学芸員を中心に担当スタッフ 4 名が指導に当たった。

実習内容は以下のとおりである。

- ① 館長講話 …本ミュージアムの成立ちと特色について
- ② 資料登録 …新規入手資料の調査・登録作業
- ③ 事務作業 …秋季展案内書類の発送準備
- ④ 資料整理 …生活美学研究所蔵書の整理作業
- ⑤ 展示企画 …IR 館 1 階常設展示の計画・実施
- ⑥ 広報活動 …ミュージアム活動周知のための SNS 発信
- ⑦ 講演会 …防虫防カビ専門家による講演会

1 日目

午前、横川館長によるミュージアムに関する講話、学芸員の職務に関する話（森担当）を聞いた。午後は、生活美学研究所の未登録資料の調査、登録作業をおこなった（平担当）。…①②

2 日目

午前、秋季展に向けて関係各位へのご案内資料の発送準備に参加した（並木担当）。午後は、生活美学研究所蔵書の分類・整理、再配架作業をお手伝いした（泊里担当）。…③④

3 日目

常設秋季展「秋の風物詩」について、展示主旨を学び展示資料候補を確認し、自分が担当する資料について文献調査をおこない、キャプション文を執筆した（平、森担当）。…⑤

4 日目

午前、前日の作文をもとにキャプションパネルを作成し、展示ケースの展示計画を立てた。午後は 1 階展示ケースを清拭して実際に展示・撮影をおこなった（平、森担当）。…⑤

5 日目

午前、広報活動概要の講義を聞き、実際に SNS に挙げる原稿を執筆した（並木担当）。

…⑤

午後は、文化財現物調査研修会「実例に基づくミュージアムの収蔵環境整備について」に参加し、イカリ消毒株式会社江副陽一氏の防虫防カビに関する講話を聞いた（並木担当）。

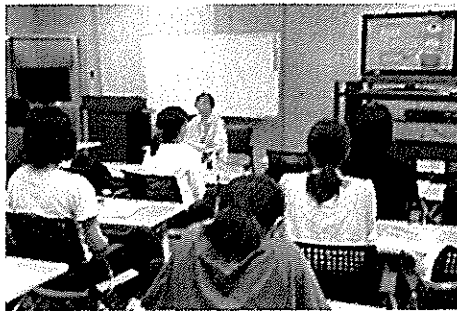
…⑥

昨年度の実習プログラムでの1階常設展の企画ではコンセプト段階から受講生に決定させたが、今年度はテーマ「秋の風物詩」と展示資料をある程度示した上で、学生には各自担当する資料の調査、キャプション作成に重点を置く方針とした。そのため資料調査にじっくり取り組むことができ、充実した経験となったと考えられる。

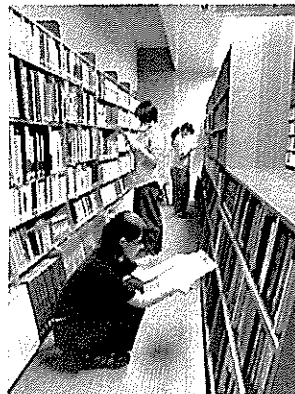
受講生の実習記録で、ほぼ全員が最も印象に残った仕事は「秋の風物詩」展の展示作業、最も大変だった仕事は生美研蔵書の整理作業と記述している。

今年度の実習では、新たに事務作業として郵便物の発送準備や SNS を使った広報活動の体験などを組み入れたが、学芸業務の多様性を知る上でも、ミュージアム業務の手伝いという面でも良かったのではないかと考えている。

以上



館長講話



図書整理



常設展示作業



秋季展と受講生

「茶道および裁縫を通じて伝承された紐結びに関する研究」

矢島 由佳（大阪大学大学院 博士後期課程）
京都ノートルダム女子大学/金沢美術工芸大学 非常勤講師

< 研究概要 >

現在、私は、博士論文で「近現代の女性によって形成された花結び/紐結びの文化史」に取り組んでいる。これまでの美術史やデザイン史の研究者は、茶道や香道にみる物質文化についても関して研究してきたが、花結びをその中に十分に含めてこなかったほか、明治から1970年代までの学校教育にみる花結びの伝承の系譜も考慮して論じてこなかったため、花結びの文化史は十分に明らかにされているとは言い難い状況にある。そこで本研究は、江戸から現代までの花結びの意味の変遷を、その伝承の担い手が誰であったのかについても明らかにしつつ、論じる。以上の博士論文の一部となる研究、すなわち「茶道および裁縫を通じて伝承された紐結び」について2025年後半は研究を進めており、その概要を以下に述べる。

第一に、茶道を通じた装飾的紐結び「花結び」に関する調査について述べたい。拙稿『The Development of Hanamusubi Use in Tea and Incense Practices during the Edo Period』(ICAS12/Amsterdam University Press, 2022)は、江戸時代において茶道で用いられる仕覆および香道で用いる志野袋にどのような花結びが用いられ、それが視覚的にある種の「言語」または「象徴」として用いられてきたのかの一端を明らかにしたものである。その後、装飾的紐結びの伝承について1980年代まで考察対象の時代区分を広げて調査を進める中、雄川丘甫『玉のあそび』(1801)に記載された茶道の仕覆に施された花結びを石州流の師範である橋田正園氏が実際に紐で結んで復元した取り組みが1980年1月7日の朝日新聞で取り上げられ、花結びがその後注目されるに至り、その後女性の趣味の手芸に位置付けられていくことを明らかにした¹。また、橋田正園氏および弟子の田中子氏による花結びに関する展覧会が実施されてきた際にも手芸としての新たな創造性ではなく、茶道の系譜にある点に焦点を当てた展示内容が目立った。具体的には、『玉のあそび』から復元した花結びに加えて、江戸時代前期の儒学者・林羅山が著した随筆、『南方録』(1600年代前半頃成立)にみる「蜻蛉結び」を復元したものが1981年に初の美術館での展覧会として思文閣美術館にて展示された。その後、同様の結びの展示は1999年には畠山美術館の冬季展にて再度展示されている。

このように展示履歴は明らかになってきたが、そもそも『南方録』にみる「蜻蛉結び」の伝承について論じられてこなかったため、詳細は未詳である。というのも、2007年に福岡市美術館にて、花実山三百回忌を記念した「南方録と茶の心」展が開催され、そこで南方録にみる「蜻蛉結び」の展示があったことをウェブ検索結果から確認できたのだが、それは、前述の橋田氏の復元した「蜻蛉結び」とは異なるものであることがわかった。そのため、福岡市美術館で展示されていた「蜻蛉結び」を何者が結んだのか、その結びは現在も茶道で伝承されているのかについて、同展覧会関係者に聞き取り調査を行い、明らかにしたいと考える。また、これまで仕覆に伴う長緒で結ぶ花結びを中心に調査をしてきたが、今後は茶道において用いられる茶壺にも茶壺飾りとして知られる紐結びの装飾についても調査を進め、先行研究にて十分に研究されてこなかった茶壺飾りにみる紐結びの意味について考察を行いたい。具体的には、彦根城博物館所蔵の井伊直弼にゆかりのある茶壺飾りについての調査に加えて、「名物」という概念を手がかりに茶壺飾りに内在する意味を明らかにすることを試みる。その際、茶の伝書、国内外の美術館・博物館で実施された茶壺に関する展覧会図録を参照する。さらに、明治時代の礼法教育に含まれた茶道の授業において、茶道で用いる花結びが教授されていたことが教科書記載内容からわかってきた。そこで、どの程度の期間、どのような記載内容のもと、茶道で用いる花結びが礼法教育で伝承されてきたのかについて国会図書館等で調査を行う。その上で、上述の英語での会議抄録を改稿し、研究ノートとして茶湯文化学会に投稿することを目指す。

第二に、裁縫を通じた装飾的紐結び「花結び」に関する調査について述べたい。花結びは裁縫の系譜でも伝承され、裁縫教育で用いられた教科書にも被布に用いる入紐の結び方が記されてきた。このような裁縫教育で用いられた教育資料の見直しは、2020年頃から日本家政学会服飾史服飾美術学会を中心に行われるようになってきた。そこには「紐結び見本」も含まれ、京都女子大学、戸板女子短期大学、武庫川女子大学が有する物に関しては概要を把握しているが、その詳細および類似資料の調査を進めていきたい。

¹ 矢島由佳「1970年代後半から1980年代にみる花結びの伝承：カルチャーセンターと社会背景に注目して」『デザイン理論 85』意匠学会（2025年1月）

